幻に揺れる淡い島

KAHO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻に揺れる淡い島

【Ｎコード】

Ｎ４７３８Ｘ

【作者名】

ＫＡＨＯ

【あらすじ】

人類平等に与えられた六つ目の能力として「幻力」が新に発見された。少し鈍感で臆病な主人公の冴森或斗（さえもりあると）は、恐れる事態を想像することに限って実現してしまうその運命を嘆いていた。そんな時、或斗の前に突如現れたアニメ界のキャラクターココと、「仮日本」とも呼ばれる不可思議な島での任務を強いられた現実が襲う――その一方で、国は新しい霊エネルギーで新日本を創ろうと必死だった。どうにか「娯楽園」を成功したい一心で国民の「幻力」に頼り切ってしまったことで、或斗の島での生活に大きな問題が突きつけられ

ることになるのだった。

六つの力

全ての人間には、必ず、不思議な力が微力ながら備わっている。
有数の霊能者たちが発見した「幻力」には、これまで不可能だったことを可能にする偉力があると言われている。
例えば、通常、人間が「空想だけ」で装丁も中身も白紙の本に物語を書くとするとどうなるか。
当然、中身は白紙のままである。空想したキャラクターやストーリー展開こそ脳内に刻まれるけれど、想像しただけで白い紙に文字が浮かび上がることは絶対にない。現在の科学技術を応用したとしても、空想と連動させた物質が目の前に現れることは断じて無だ。
しかし「幻力」を利用することで、脳内に描いた作品の制作が可能となるのだ。強く想像すればそれだけ鮮明に輪郭が刻まれ、その肌触りや香りも思いのままに誕生する。それこそが先天性の能力の一つであると霊能者たちは説き、全ての人間が秘める異能微力の第六気となされるに値するとされた。
その六つの能力こそ、我々人類が「特別」と思い込んでいる力であり、好奇心の塊だけに過ぎなかったが、神が平等に与えた力こそ「霊力」「予知」「言霊」「既視感」「千里眼」「幻力」の六つであるのだった。
だが、民衆らが六つの力の存在に気づかされる瞬間はいつも「偶然」として解釈され、さらにそれが特殊な力であると察知する人間は稀代である。たとえ気づいたとしても自身でコントロールするには訓練が必要だった。
六つの力にはそれぞれを発揮できる能力値という数字が存在する。六つ全ての合計を十とした時、「霊力・一」「予知・四」「言霊・三」「既視感・二」「千里眼・マイナス一」「幻力・一」が一般的な値であり、「一」は意識しないと操ることは難しいからゼロに近いのが正しいとも言える。

霊感の強い霊能者などは「霊力・三」を持った体質で生まれることが多い。しかし能力値の合計の範囲が広がることはないから、「霊力・三」の人間は、大抵が「予知・二」であるのが標準的である。

そして「千里眼」については、誰もが使える枠を持っているのだが、他五つの能力と引き換えることが条件とされていた。

標準と異なる数値を持って生まれた人間は日本国だけでも十パーセント以下に過ぎず、中でも「幻力」が優れた人材は数えるほどしかいない。有数な霊能者たちが霊感を頼りに長年に渡って探し続けても、三名が限界であった。

「幻力」を粗末にしてはならない。他の五つを落として単独で「十」に上げる鍛錬をしたとするならば、「幻力」一つで六つの能力を使い分けることが可能であることが判明したからだ。

霊能者たちは言う。

「幻力」そのものを、沢山の国民から抽出して一塊にすることで、どんな不幸をも幸福にする一つの国が出来るはずだと。極楽のようなとても美しい環境が出来るに違いないと――。

しかしそれには完璧な幻想と全てを担う三名の協力が必要不可欠であり、また、沢山の人間の理解が懇望されるものだった。

悪い予感は想像のとおり

冴森或斗（さえもりあると）は、頭まで布団をスッポリ被ってベッドの中で考えていた。

どうすれば良い？　どうすればあの肌の温もりを忘れることが出来る？　どうすれば笑っていられる？　どうすればこのショックから立ち直ることが出来る？

そもそも周囲は知っていたのか？　知っていて黙って見ていたのか？

クソォ……どいつもこいつもふざけやがってッ。

或斗は呻きながら布団の中で転がった。ベッドがキシキシと鳴る。

嫌な出来事というのはどうしてこうも実現してしまうのか。叶えたい夢は山ほどあるというのに、叶えたくない夢だけが叶ってしまう現実……不公平すぎはしないか？

人生はそう簡単にいかないのは百も承知二百も合点けれど、どうしてこんな運命を背負わなきゃならないんだッ。　あの白い肌はそう簡単には忘れられるはずがないだろうに……とはまぁ、もしかしたら全ては自分が悪いのかもしれないのだけれど。

いや。それでも、彼女を救うにはあの方法しかなかったはずだ。もっと早く事を知っていればこんなことにはならなかったのかもしれない。良案が生まれていたかもしれないのだ。

やはり全ての最悪な結末の要因は、臆病な自分の気持ちにあるのだろうか？　校内一位を争うほどの美人と付き合っている事実が、まるで蟻に食われた樹木のように脆くも壊れてしまうのではないかといつも恐れていた。いつかそんな日が来てしまうのではないかとばかり考えていたのだった。現実がどうしても信じられなかったから。

と、或斗が布団の中で大きく左右に転がったその時だった。

ボーリングの玉が落下したような音が響いたと思ったと同時、或

斗の全身に大きな衝撃が走って、ゴミが散乱するフローリングの上に身体が転がり落ちた。

「痛ってぇぇぇぇ。何なんだよ……」

もっそりと布団を剥ぎ取って顔を出すと、腰に走る鈍痛の原因がそこにはあった。

単にベッドから落ちたと言うのは大きな間違いで、本当に巨大な玉が臥所目がけて落下したかのように、無残にも脚二本が根元から骨折してしまっていた。

ベッドはベッドでも、厚揚げのような分厚いマットレスが置かれた弾力性のあるのとは違って、木材で組み立てられた上に薄い布団を敷いただけの硬い寝床である。

その貧乏臭い構造のせいで、身体は床に叩きつけられたくらいのショックを被り、ロールキャベツと化した一体が転げ落ちてしまったのだ。

「マジかよ……ありえねぇ」

骨折した箇所は、壁側とは逆の二本で、布団と下敷きはずり落ちていた。まさに簡易的なすべり台のようである。

脚の具合を見てみると、どうも複雑骨折のようで、ネジの差し替えや超強力接着剤では治りそうがない。

或斗はガックリと首を垂らした。ため息までも漏れる。

以前から亀裂が入っていたことは承知だったが、何故今このタイミングで折れる？　こんな鬱している時に折れなくとも――ん？

待て、これも想像のとおりじゃないか。

或斗は立ち上がった。

クローゼットと隣接する壁側に立てかけている全身鏡に半裸の自分が映り込んだ。

続く悪事を振り返ってみて、どうも気になることが浮上した。
もしかしたら考え過ぎかもしれないけれど……自分は、天使なのでは？
想像すること―（悪いことばかり）がこんなにも現実化されるのは、自分に予知能力があるからで、しかしその予知能力と言うのは、実は神の御託宣であって、寝ている間に耳にしているからなのでは？　階段から落ちるとか、財布を落とすとか、恋人と別れたとか、ベッドがすべり台になるとか――夢の中で聞いた神のお告げを、覚醒した頭が知らず知らずに反芻しているだけに過ぎないのでは？
本当かどういうかは分からないけれど、天使とは神の使者であり化身でもあると何かの本で読んだ記憶がある。
だから自分は、天使なのでは？　と思ったのだ。
実に数日前、あんなことを想像していたばかりだ。
ベッドの脚に亀裂が入ったのは一年ほど前、友人らが最新のゲームをしに遊びに来た時だった。
口うるさい母親も姉貴も留守にしていたお陰でいつになく羽目を外し、元気だけが取り柄の男四人はゲームをしながら陽気に騒いでいた。高校一年生になったばかりのあのころはまだ中学生気分が抜けなくて、有頂天になると、床を叩いたり奇声を発したり転げて大笑いしたり、それこそ、硬いベッドの上だろうと飛び跳ねたりしたものだ。
ベッドは小学校の時分に与えられた年代物だったことも相まっていたのかもしれないが、ベッドをリングと見立てて、柔道部に所属する友人Ａが、コンピューター部に所属する友人Ｂにプロレスの小技を決め込んで面白がっていたあの騒ぎが、脚に致命傷を負わせた大きな要因だったと思われる。
小さな寝返りを打つだけで軋むベッドが少々不安であった。いつか突然ポッキリと脚が折れてしまったりしないだろうかとキシキシ鳴るたびに思っていた。
壊れたら新しいのを買ってもらうか、潔くベッドを離れて床に布

団を敷いて寝れば良いだけのことなのだけれど、冴森家はそう簡単にいかない。と言うのも、たとえ老朽化の進んだベッドが破壊したとしても、口うるさい母親にこっ酷く言われるのがオチだ。キーッと目を吊り上げて、壊れた原因をムチャクチャな裏づけで解釈し、それを押し付け、いつまでもグチグチ言われるのだ。脚が折れるよりも、折れることの恐怖よりも、母親の発狂だけは避けたい。よって、折れた時のことを想像すると胸の中に暗雲が広がる思いであった。

そして今日、折れた。

或斗は鏡に近付いた。

父親の酒癖が悪いのは子供のせいではないし、だらしない夫への不満が蓄積しているのだって知ったこっちゃない。何かにつけて文句を言うことが一番のストレス発散なんだろうけど、それに息子を利用するのはやめて欲しいものだ。

――と、階段を上ってくる足音が聞こえてきた。母親のものだと一瞬で分かる。ベッドの破壊音は、当然一階まで響いたはずだ。

屍となってしまった寝床は、どうにもこうにも直せないし、隠したとしてもいづれはバレることになる。素直に白状するしかなさそうだ。

ガッカリでため息がこぼれる。

階段を上がる音から、荒々しくスリッパが廊下を伝う音に変わり、突き当りの部屋まで猪突猛進しているのが窺える。

来るぞ来るぞ。「ちょっとうるさい！　何やってるの！」なんて凄い形相でドアを開けるぞ。

はぁぁぁぁ。また説教が始まるのかよ……。

或斗は投げ捨ててあったトレーナーを着た。上半身裸も吼えられるからだ。

ノックなしにドアが開いた。予測通りの言葉を吐いて。
母親の顔は、決まって鬼の面だった。眉間にシワが寄った瞳で部屋の中を数秒間なめ回し、間違い探しの答えを知ってしまったその造作は、強い憤慨を表していた。
鬼のキンキン声が止むまでの間、或斗は別のことを考えることにした。そうでもしないと逆に母親を怒鳴りつけてしまいそうになるからだ。最悪にもそんなことをしてしまったら、飯抜きとか小遣いなしとか、陰険な方法でやり返してくるのが冴森家の母である。
マジ勘弁だ。
よって、ここは反省している表情を見せかけておいて、頭の中では楽しいことを想像する対策術を速やかに実践するに限る。効果はその時々によって差異があるけれど、やらないよりはやった方が気休めにもなる。
楽しいこと――そうだな。クラスメイトのトラブルメーカー的存在の神埼登(かんざきのぼる)が、命よりも大事にしているとか言明したアニメの、ええっと何て言ったかな？　ココナッツじゃなくて、ココアじゃなくて、ああ！　ココリュード！　金髪小学生が主人公で、小学校に潜り込んだ妖怪を退治していくという主に幼児を対象としたアニメである。魔法が使えたり犬が喋ったりと夢が沢山詰まった内容となっている。
そのココリュードの主人公であるココの等身大ポスターが、アイツの部屋から忽然と消えたらどんな顔するかなぁ？　慌てふためくだろうなぁ。パニックに陥って部屋中に色んなものをぶちまけながら涙目で探すんだろうなぁ。ココに似せただろうあの金髪オカッパを振り乱して。
考えただけで笑える。
とはまぁ。彼の悪すぎる素行と比較すればそれくらいの罰を実際に与えても優しいくらいだ。
陰険な苛め、教師いびり、暴力、タバコと、神崎に泣かされた人物は数多くいる。

金髪オカッパがアニメのココを溺愛していることは、偶然にも彼の部屋に上がることになった或斗だけの秘密だった。担任に頼まれて同じ方角の或斗が届け物を頼まれたのが切欠であった。神崎は留守だったが、一つ言伝もあったし、部屋に上がって待たせてもらったのだ。

アイツ、天井にも巨大ポスター貼ってたな。ココの水着姿のイラストだった。あれを見て変な気持ちにでもなってるんだろうな。さぞかしココも迷惑しているに違いない。

まさかアイツ、ポスターの小学生に話しかけてたりしないだろうな。いや、してるな。あれはしてる。想像で会話だってしてるんじゃないか？　一人二役で楽しんじゃってるはずだな。「俺って金髪似合ってない？」とか自賛混合させて質問しちゃってるな。「君と一緒の色だね」とか言う具合に。

宝物のココのポスターが一枚も残らず消えたら、アイツのことだから学校に私情持ち込んで色んな人に当り散らすだろうな。そして一番使えそうなヤツにココのポスターを買って来るよう命ずるに違いない。アイツはそんな野蛮なヤツだ。

そもそもココというキャラは何年生の設定なのだ？　身長は？　体重は？　スリーサイズは？　好きな食べ物や嫌いな食べ物は？

アニメと言えども、人間と同様のプロフィールは存在するのだろうか？　一度、本人に訊いてみたいものだ。

そんなことを想像して気づけば、母親の姿は消えていた。

神埼を甚振る空想は意外と使えるし楽しいかもしれないと或斗は思った。母親の小言の余韻が薄いってことは、夢中になって面白がっていた証拠だ。

或斗は出窓を開けて背伸びをした。

いや～これは使えるぞ。

外は秋の風がゆっくりと流れている。銀杏の葉がわずかに靡いた。

消えたポスター

それは突然の出来事だった。
その日の夜、お風呂から上がった或斗が部屋に戻ると、広範囲に渡って、白い壁面に嫌がらせがされていた。ココの特大ポスターが数枚貼り付けられていたのだ。
或斗は絶句して、フェイスタオルを放り投げて五歳年上の姉の部屋に乱入した。

「何だよあれ！　姉貴の仕業だろ！」

姉はソファーの上で体育座りをしてファッション雑誌を見ていた。短大生の彼女は最近になってオシャレに目覚めたようで、バイト料のほとんどが洋服代へと消えているのを或斗は知っている。
姉は母親の血だけを受け継いだかのように、難癖ばかりつける可愛くない性格をしていた。

「つうかアンタ何様？　ノックもしないで部屋に入って来ないでよ」

付け睫毛を取った目は実に怖い。昼が向日葵とするならば、夜は食虫植物のハエトリグサだ。周辺を飛び回る煩い蝿をパクリと食べる怪奇な生き物である。

「俺は蝿じゃないッ」
「はぁ？　バッカじゃないの」
面倒臭そうに睨み、目を細めて威嚇する。
或斗は姉の視線を避け、咳払いをし、
「とにかく、アレはどういうことだよ！」
と、自分の部屋の方角を指し示した。

「だから何がッ？」
雑誌をテーブルに叩きつけた姉は、ショーパンから伸びる自慢の長い足で仁王立ちした。
「いきなり入ってきて何だって言うの！」
そう怒鳴るハエトリグサの目がキリリと吊り上がったが、据わっている。そうとう怒っていると見える。なんとも奇妙な目だ。
或斗は怯まなかった。母親と言い姉貴と言い、この家では女が強しとされがちだったが本当は昔から不満だったのだ。悪ふざけの悪戯は水に流すなんてできっこない。
「しらばっくれる気か？」
「だから何にも知らないっつうの！」
「ウソつくなよ。じゃあ誰がやるんだよあんなことッ」
オタクしかいないんだよッ。
「何なのもう！」
半ば呆れるように腕を下ろした女子大生は、入り口に立っていた弟の肩を押し退けた。
「どれどれ！　何があるって！？」
踵を鳴らし、或斗の部屋に入って行く。
或斗は姉の後に続いた。

――と、信じられないことに、壁は白一色で、見慣れた無地だけが広がっていた。
或斗は目を瞬かせて一回転するが、どこにもココは見当たらなかった。
今しがた見た光景が幻だったかのように、幼稚な笑顔は紙と共に消えてしまっていた。
「な～んもないじゃん。アンタ、とうとうヤられたんじゃない？」
人差し指でコメカミを指して姉は言う。口端を吊って笑いながらもとても侮辱している様子だ。

「ウソじゃない！　ココリュードのココのポスターが貼ってあったんだッ」
「バッカみたい。あんな小学生マンガのポスターをこの私が持ってるとでも思ってんの？　人を犯人扱いしないでよねッ」
姉はそれからベッドを見、顎を突き出した。「それも私のせいにするつもり？」

或斗は姉の言葉を無視してポスターを探した。ないわけがない。ゴミ箱の中、机の引き出しの中、タンスの中、壊れたベッドの下――隅々まで探したが、どこを探してもココは見当たらなかった。
幻覚か……？
いや、そんなはずはない。この目でハッキリと見た。中には、神崎が飾っていたのと同じポスターもあった。ココが眩しい太陽に照らされて、紺色のスクール水着姿でジャンプしているやつだ。そう、天井に貼られていたデザインのものだ。
あれは絶対、錯覚などではない。

「お詫びとしてビッグバーガー奢ってもらうから」
首を垂らす或斗の肩を姉が叩いた。振り向くと彼女は掌を揺らして待っていた。
或斗は渋々ながらも財布から五百円玉を出した。
「誰が単品って言った？」
間髪いれず姉が冷静に攻めてくる。
クソッと思いながらも口には出さず、五百円玉をしまい、明日の昼食代として取っておいた千円札を取り出した。
その刹那、姉の手が敏捷にお札を捉え、スッと抜き取った。
「今度犯人にしたら十倍だかんねぇ」
陽気に言い放ち、ドアを開けっ放しで自室へと消える鬼女のお尻は笑っていた。

或斗は両肩が下がる思いだった。ズーンと何かがのしかかる。
急な出費が痛いところだが憂鬱に溺れそうになる気持ちはそれだけではない。
ココのポスターだ。なぜ、なぜ消えてるんだッ？　あんなに沢山ベタベタと貼られてたじゃないかッ。
或斗は天井を見上げた。
どうしても納得がいかねぇ。
或斗は立ち上がって腕をこまねき、室内を右往左往した。
雨が降っちゃおうと槍が降っちゃおうとあの光景は幻覚なんかじゃないし、窓の鍵はしっかり下ろされている。外からの不審者が侵入したとも想像し難い。

或斗は壁と向かい合ってからしばらく見つめ、撫でるように触った。押した。爪を立てた。耳を押し付けた。匂いをかいだ。
けれど、何一つ不審な点は見つからなかった。
或斗は再び腕を組んだ。
姉貴の犯行じゃないのであれば、母親や父親とも考えられるのかもしれない。けれど、テレビを観て大笑いする父親の笑い声は風呂場まで常に聞こえてきていたし、電話していた母親を風呂に行く途中で見かけていたが、上がった時も同じ体勢で話をしていた。風呂は精々十五分程度だし、あの様子だと一度も中断しないで話していたと思われる。第一、両親は、日曜の早朝に放送されているアニメを知らないし、それを使って悪戯するようなユニーク度は持ち合わせていない。
ではどういうことだ？　誰がどうやってココのポスターを貼り付けて、剥がしたのだ？　そしてそいつはどこのどいつだ？

コンコン。

ふいにドアが遠慮がちにノックされた。がしかし、開け放されっ

ぱなしになっているドアの向こうには誰もいなかった。薄暗い廊下が真っ直ぐ伸びている。
或斗の胸がざわりとした。不可思議なことが起こった後の物音はリアルに怖い。廊下の突き当たりにあるトイレのドアが今にも開きそうで――と思ったその時だった。
誰も入っていない消灯されたトイレのドアが、ゆっくりと開いたのだった。

「え……何……？」

或斗の足がその場で凍った。ドアを閉めたくとも身体が言うことを聞かなかった。
トイレの扉は非常に低速で開き続けている。

「ウソだろ……」

心臓が不規則に動き、背筋に氷柱を立てかけられたかのような寒気が走った。
足は地の底まで根が張ったようにビクリともしない。
ついにドアが半分まで開いて、白い便器の一部が見えた。
或斗はグッと目を瞑った。便座に誰か座っていたらと思うと見続けることができなかった。
だが、もし本当に幽霊的な何かが中にいて、こうやって目を閉じている間にも接近して来ていたらどうしよう……。
無音で廊下を伝って、部屋に進入して、目の前まで来ていて、冷たい手で身体を触れられたら……。
或斗の想像していた映像は、もはやホラー映画の山場の一齣だった。
幽霊にお目にかかったことは一度もないけれど、頭の中で描く自画は、幽霊と至近距離で向かい合っている姿だった。酷く怯え震え

る我が体躯は、今にも気を失ってしまいそうである。
すると、或斗の腕に何かが確実に触れた。豆腐のような、まさに冷たい人肌のような感触だった。
或斗の身体がビクンと反応し、全身にカビが繁殖したかのような衝撃が広がった。
更にもう一度、今度は両腕に指のような物質が触れた。
言葉を発することも思考を巡らすことも不可能で、恐怖の絶頂を軽々と越えてしまった或斗は、凍った悲鳴を口の中に潜めたまま、白目を剥いて後ろにぶっ倒れた。

鏡の波紋

少年が仰向けになったその顔を覗く小さな女の子は、フーッと息をこぼし、床にペタリとお尻をつけた。

「あらら。気絶してしまいました。意外と怖がりさんですな。特別指令幻想団体の一員に抜擢されたことも知らないようだし。何よりも自分を天使さんじゃないかなんて言うような男子さんときましたですか。こんな人とパートナーなんて大丈夫ですかな？」

その声はどこかとぼけたようでいて、まだまだ母親を恋しがる幼さである。

「自分の幻力が強力であることを知らないんですな。上島の存在も、上島の現状が予想外に大荒れしてしまってることも知らないんでしょうな。このまま連れて行ったら目覚めた時の景色に腰を抜かしちゃうかもですなぁ。ま、仕方ないです。時間もないし、いつ目を覚ますか分からないから説明は後回しとするです」

小さな手が、床の上でのびている或斗の瞼を覆った。

「それにしても自分がココを呼んでおいてお出迎えもしてくれないなんて。酷い殿方です」

ココと言う少女は、開く気配のない瞼の上で掌を回すように動かした。そしてもう片方の手で、首から胸に提げている円形のペンダントを掴んだ。古い青銅を細工したようなとても地味な装飾品である。大小さまざまな針が秒針のように動いていて見た目は煩く、時計と言うより時計の仕掛けの方に似ている。回転速度や方向など、どれも不規則に針は動いている。

ココが少年の瞼の上で掌を動かすたび、ペンダントの一番長い針が緑色に光った。

「うん。残力は十分ありますな。軽い想像ばかりしていたのが功と出たみたいです。上の国に行っても簡単にインバースを黙らせることできます」
さ、早々と出発するです。と彼女は立ち上がって全身鏡に歩み寄った。映る自分の姿を見つめる。
「う~ん。その前にこの格好はチョット困るですな。どうして殿はスクール水着なんか想像したですか」
大の字の顔を睨むように振り返ってから、少女はクローゼットを無遠慮に漁った。
引っこ抜いたのは唯一女性っぽい赤い無地のTシャツと茶色い皮のベルトだった。
水着の上からTシャツを被り、ミニのワンピースに見立てるようにベルトでウエストを縛る。ベルトも大きくて穴が足りないためにリボンのように結ぶ方法しか取れないのだった。最後に、ペンダントをシャツの外側に出した。
「大きいけど仕方ないです。靴は……罰としてあっちで殿に買ってもらうです」
ニッと白い歯を見せて笑ったココは、クローゼットを閉め、浮き立つ足取りで鏡の前に戻った。
「さ。準備は良しです」
口をキュッと閉めると、ペンダントの裏側を鏡に向けた。

しばらくすると少女を映す鏡からその姿が消え、ガラスが溶けたかのような波が浮かび上がった。
それは瞬く間に細かな波紋となって、一つの大きな円となった。まるで水の中で大きな鉄のリングを映しているような光景である。
ココは、今度はペンダントを或斗の方へと向けた。
少女が青銅を上方へクイと向けると、或斗の身体が僅かに浮く。続いて少女が鏡の方へ腕を動かすと、或斗の身体は鏡に吸い込まれるようにスーッと動いた。

或斗の姿が完全に飲み込まれるまでココは青銅を下ろさなかった。
その後、自ら鏡の中に潜り込んだココをも飲み込んだリングは、何事もなかったかのように従来のスタイルへと復した。

或斗が消えてから数分後、自室から出てきた姉は、弟の部屋のドアが開きっぱなしなのに気づき、「だらしない。閉めなさいよ」と小言を吐きながら何気ない様子で室内を見た。が、当然そこには或斗の姿はなく、電気だけが無意味の明かりを落としていた。

――あくる朝、冴森家に一通の封書が届いた。差出人は「未来推進省」と名乗る組織で、その名から国の行政機関のようだと思われる。しかし一家は、これまでに聞いたこともない奇妙な名称に不信感を抱きながらも、長男がいなくなった事実との関連性を認めざるを得なかった。

文書によると、或斗には、「幻力」とやら能力が一般レベルよりも超越してるとのことで、極秘に進められてきた新日本国の研究と進展に貢献すべき「特別指令幻想団体」に任命され、現在の「仮日本」なる「娯楽園」へと長期派遣されたということだった。

何のことを言っているのか全く理解できない一家は、同封されていた約束手形の金額を見て腰を抜かしそうになった。

団体の任務は、無期限で尚且つ生命に危機を及ぼすとても過酷な内容であるため、一員に選任された時点で一人につき「五千万円」の報酬、そして万が一の場合には最高で「三億円」の賠償金が家族に支払われることが規約の一つとされていた。

手形を透かすように見た長女は、もしかしたら詐欺の一種かもしれないと言って冴森家の主に確認の電話をかけるよう命じた。

素直に応じた父だったがしかし、えらく丁寧な女性の説明は受けるだけ無駄だった。手紙の内容と同じことしか語られなかったのだ。だが、詐欺の疑いを訴えると、後日、担当大臣が手形の期日前に挨拶に伺うことになっていると言われ、そしてあちらでは、まるで或

斗がノーベル賞受賞者であるかのような扱いであったのには、息子が消えた現状をそっちのけにしてでも、父は顔をほころばずにはいられなかったのだった。

上島の地

声がする。

「別れるなんて言わないで……」

切なく泳ぐそよ風のような女性の声だった。

「ずっと一緒にいて」

或斗はその声を知っていた。

葵恵(きえ)……。

透き通るように艶やかな白い肌と、緩く編み込まれた柔らかい黒髪の彼女は、学校の中でも群を抜いて目立つ美人だ。鼻筋が通っていて、決して大きくはないけれど女性らしい温もりのある瞳は、実に純な日本美人そのもので、まるで白い百合のような雰囲気を持っている――愛流川葵恵(あいるかわきえ)は、数日前まで或斗の恋人だった。

「どこにも行かないで」

葵恵の声は近い。耳の傍をフッと横切る。

葵恵……。

見えない彼女を探すため手を伸ばそうとするが、自分の身体すらどこにあるのか判然としなかった。腕の感覚はあるのに、自由に操ることが出来ない。

「もう一人にしないで」

或斗は、声の尻尾を追いかけるように顔を向けた。
手がダメなら瞳で彼女の存在を認めるしかなかった。
けれど、どんなに目を皿にしても、見えるのは真っ白な靄だけだった。
葵恵、どこだ？
或斗は靄をかき分けるように歩いた。感覚しかない足と手をひたすら動かし、歩いた。
果たして進んでいるのかもがいているのか分からない状況で、或斗はふと、やはり自分は彼女を求めているのだと痛感し、立ち止まった。

葵恵との間にあんなショックな出来事があったというのに、彼女のことはどう頑張っても嫌いになどなれない。むしろ以前よりも彼女の笑顔を見ていたいとすら思うようになっていた。
だがその願望も、今では果てしなく続く夢のようであり、底の無い暗闇のようでもある。
以前のように密着するように寄り添って、笑い合う日がもうないのかと思うと、それだけで十年は歳を取ったような気分に陥る。
自分は情けない。男なのに、辛い現状から逃げているだけのような気がする。
彼女のためを思って別れを切り出したはずだった。それなのに今振り返ってみると、あの選択は自分自身に対する擁護だったのかもしれない。後に訪れる悲劇から逃げたい一心で、彼女から遠ざかったのかもしれない――最低だ。
悔しさのあまり奥歯に力が入る。
今さら後悔するなら、こんなに辛いことはない……。

「或斗――殿」
ほぼ反射的に腕を伸ばした指先に、冷たい人肌が不意に触れた。

或斗は咄嗟にそれを掴んだ。人の腕であることが分かった。
「葵恵……」
顔は見えないけれど、靄の奥に彼女がいるような予感がした。
「殿――殿？」
そう呼ばれ、或斗は今まさに掴んでいる腕をグッと引いた。
「痛いッ」
声は聞こえるのに、どんなに引っ張っても葵恵の白い腕は現れなかった。
しかしここで放してしまったら彼女には一生会えないような気がして、或斗は何度も繰り返し強く引いた。
「痛い痛い痛い。痛いですってば！」
この時、苛立つように叫ぶ声が、そよ風でないことに気づいた。
葵恵じゃない。
「起きてくださいッ。こんな所にいつまでも寝てられないです」
――子供だ。キンキン響く子供の声がする。
何かが狂ったようだ。葵恵はこんな下品な口調をしていない。
或斗は靄の奥に集中して耳を澄まし、改めて葵恵の声を探した。
すると、「起きろぉぉぉぉ！」
鼓膜が破れんばかりの金切声に心臓が反応し、或斗は飛び起きた。
「な、何だ……？」
辺りを見渡すまでもなく、或斗の傍にちょこなんと座っている赤い服を着た女の子と目が合った。
「あ……え……は？」
誰だ？　この子は、誰だ？　と言うか、どこかで見たことがあるような気がする……。
女の子の目が低く据わった。
「その顔は、覚えていないってことですな」
「いや……あ～～～」
或斗は瞳をグルリと回した。
覚えていないと言うか何と言うか、そんなことよりも、自分はこ

こで何をしているのだ？　むしろここはどこだ？
或斗は首と眼球を動かして辺りを見た。
――分からない。自分のいる場所の判断がつかない。ただ、完全に乾き切った芝の上に座っていることと、その芝がどこまでも続いていることと、真正面には土手が左右に続いていることと、青い空が広がっていることと、遠くで細長い煙突から黒煙が上がっていることだけが見て取れた。肌に感じるのは乾燥した常温の外気だけだ。

どうしたものか。こんな寂れた場所、来た覚えも記憶もない。
ふと見ると、女の子は或斗を睨み続けていた。
名前を聞くべきかどうか迷った末、或斗はとりあえず微笑んでみた。が、彼女には少しも通じなかった。

どうしたものか。葵恵の夢を見ていた記憶はきちんとある。あれは確実に夢であった。
途中から子供の声が聞こえて、突然耳元で叫ばれて、その衝撃で目が覚めた。
が、このとおり、覚めても夢の中にいるってことは、実際は夢から覚醒していないってことだろうか？　いやちょっと待て。そうなると実際の自分は寝ているということになるのだが、それは感覚的に少し違うような気がする。

或斗は自分の身なりを探った。ボロボロの寝間着姿に裸足だ。おまけに髪の毛は湿っている。夢であるならもう少しオシャレであって欲しかったものだ。
或斗は試しに自分の頬をつねってみた――とても痛かった。

「何度も起こしたです」
女の子は跳ねつけるようにそう言った。
女の子の顔を見る限り小学校低学年と思われる。金髪を頭の上の

方で二つに分けて結び、桃色のリボンをつけている。垂れたウサギの耳のような束は少し動いただけで揺れた。
肌は白く、頬が仄かに赤い。太ったどんぐりのように黒くて丸い瞳は頻繁に瞬きされる。頬の山との距離が狭いのは幼い証である。
――やはりどこかで会ったことがあるような気がする。ごく最近で。

「どうでも良いですが」
女の子は唇を突き出した。「これ、放してくださいな。痛いですッ」
「え？　あッ、悪い」
或斗は握っていた左手を開いた。彼女の腕を強く掴んでいたようで、その部分が赤くなっている。やっと掴んだと思った手はこの子のだったというわけだ。どうりで葵恵の姿が見えないわけだ。
いやいや待て。だからあれは夢で、これも夢なんだろ？　建造物が煙突しか見えないこの奇妙な風景も非現実的だし、目の前の女の子もどことなく人間離れしているように見える。皮膚はあっても指紋がないような、汗が流れても毛穴がないような、どことなく人形っぽいというか、等身大フィギュアが動いているような、そんな感覚だ。

「夢じゃありませんです！」
腕を擦りながらそう叫んだ少女は、「殿にココの靴を買ってもらうです！」
或斗はこの瞬間、神崎登の部屋を思い出した。アニメポスターが無駄に貼られたあの部屋だ。
そうだ。ココリュードのココ！
彼女の風采は神崎が愛して止まないココとそっくりじゃないかッ。と言うより、たった今、彼女の口からココであると名乗られたばかりだ。

いやしかし……こんなことがあるわけがない。やはりこれは夢だ。アニメのキャラクターが現実にいるわけがない。それともコスプレか？　仮装パーティーでもあるのか？　この場所はゲームの中を見立てて作った壮大なパーティー会場か？

そう思うとおかしくてならなかった。笑いが込み上げる。

バカな夢だな。

ケラケラ笑っていると、ココが或斗の頬をギュッと抓んだ。

「イデデデデッ」

頬を強く引っ張られて抵抗できない或斗は、されるがままに従うしかなかった。その時、少女の胸で揺れるペンダントが目に入った。

「これ以上ふざけないで下さいな。じゃないと、ビッグバーガー奢ってもらうですよ。単品じゃなくてセットのやつです」

ハッとした。姉貴のしたり顔が思い出される。

「ほ（ど）うしてそれほ（を）！？」

痛みが目に染みて涙が滲む。ちっちゃい割に力が尋常じゃない。

「ココは殿の頭が生んだ物質です。何でも分かるですよ」

そう言うと、彼女は満足そうに笑った。

怪奇な腕

少女の名前はココ。八歳。

通常なら小学三年生に属するはずだが、ココの身長は幼稚園児並に小さかった。百七十三センチの或斗と並ぶと、鷲と雀の差ほどもある。ちなみに好きな食べ物はアイスで、嫌いな食べ物は納豆だそうだ。―（ココリュード原作者の好みが左右しているらしい）

或斗は、常識を無視した目前の全てに引け目を感じながらも、これは夢なのだから逃げることもないだろうと思い直し、少女に言われるがまま広大な敷地を歩み出した。直ぐに自分は裸足なのだと気づいた。枯れた芝生が足裏を刺激する。

ココの話では、この変てこな風景も現状も夢ではないということだが、突然出現して突然消えたココのポスターも含め、全ては或斗自身が呼び起こしたことだと説明を受けたところで、それを真っ向から呑み込むほど或斗は柔軟じゃない。

ココは、詳しい話は後ほどと言っておきながらも、秘め事を誰かに言いたくて仕方ないと言うような口調で、「幻力」とやら能力の奇妙な話を歩きながらでもするのだが、それはまるで或斗にとっては、自分が実は女だったのだと宣告されたくらい図々しい内容であった。

想像するだけでそのとおりになるだって？　それじゃあ自分は今頃超幸せな生活をしているに違いないと或斗は思うのだった。ンなわけないだろう！　と。

彼女は言う。

「殿は昔、怖いテレビを観た後にいらないこと考えてトイレに行けなかった時あったです。そのころから幻力が活用されていたですな」

と言われてもだな……。幻力のことは算数の九九よりも知識がないからひとまず置くとしてもだ、トイレに行けなかった経験は誰の幼少期にも一度はあるに違いない。大人だってあるはずだ。二十歳を過ぎた姉貴はああ見えて怖がりだ。そのくせホラー系のテレビが好きだったりする。「恐怖体験」や「心霊現象」といったサブタイトルがついた番組は欠かさず観るのだが、必ず先に風呂を済ませている。さらに番組終了後は、こっそりぬいぐるみを抱いてトイレに行っているのを或斗は何度か目撃している。この時ばかりは姉貴も女なんだなぁと少し胸がすいたりするのだが、結局は可愛げのない鬼女である。

「本当だったらポスターの中から派手に飛び出したかったです」
出し抜けにココが言った。或斗の一歩前を歩いている。
「そのポスターのことだけど、君が貼ったのか？」
「いいえ。貼ったのは殿本人です。ポスターは元々神崎登と言う男子の部屋に貼ってあった物です。それを殿が自分の部屋に呼び寄せたです」
ココはそう言うと、或斗と向かい合わせになって後ろ向きで歩き出した。
「殿は真剣に考えてたです。神崎登の部屋からココのポスターが消えてしまえば良いと」
「いや、しかしそれはッ」
バカを言え。あれは飽くまでも冗談のつもりで――と思った時、或斗は、ベッドが破壊した時にふと思った己の悪運を呆然と感じた。
まさか、今までに現実化されていた偶然が「幻力」によるものだって言うのか？　いやいやそれはないな。だってこれは夢だ。夢の中の出来事――。
「夢じゃないですッ」
内心を見透かしたようにココが吼えた。

歩を止め、唖然とする或斗を見上げたココは、キッと吊った目尻の力を抜いた。
「これは夢じゃないんですよ、殿。ココの命に変えても良いです。この枯れてしまった芝生の上を歩いていることも、こんな世界が存在することも、今、殿の目に映っている全ては現実です。とにかく今はゆっくり出来ませんですから詳しい話は後でするです――先を急ぐですよ」
ココはそう言って前に向き直り、潔く歩調を強めた。

しばらく足が出せなかった或斗は、たっぷり吸った空気を残らず吐き、そうしてようやく身体が言うことを利いた。頭を振ると、何も考えない方が賢明なのかもしれないと脳が言った。
或斗はココの小さな背中を見ながら、そして時々は周囲の雑な風景を見ながら枯れ芝の上を延々と歩いた。
ふと見ると、ココも裸足であることが目に入った。小粒な爪に紅緋色のネイルが塗られている。よく見ると、少女が身につけている赤いTシャツやベルトに見覚えがあった。たぶんそうなんだろうと思ったが、そこにつけ込むほど性格は固くなっていないから口にはしなかった。

――どれくらいの距離を進んだだろうか。遠くの黒煙は踊り続け、見渡す限りの芝模様は、所々が泥濘で柔らかくなっていて足が嵌りそうになる。舗装された道などは一切見当たらず、裸足で歩くには厄介な大地であった。皮製のブーツが欲しいところだ。
それにしても本当に奇妙な景色である。それは遠見も同様で、一切の建築物の邪魔が阻止された地平線は、まるで空の青と平地の茶が水に溶けて別の色になっているようだ。キャンバスの上で絵の具を混ぜたらこんな具合になるだろう。
依然として前を歩くココは、まるでオモチャの兵隊のように両手を大きく振って楽しそうだ。

一体、少女はどこに向っているのだろう。夢の出口だろうか？
そうであって欲しい。
「これが夢じゃなかったらキツイぜ」
独り言のつもりで言ったのに、閑散とするこの地帯では声を潜めることなど無意味であった。
「だから、これは夢じゃないです。殿もしつこいですな」
ココは振り返り、立ち止まった。「靴を買った後にきちんと説明するです。だからもう少しの心棒です。黙ってついて来てくださいな」
「あ～今じゃダメなのか？」
「ダメってことはないです。けど、仲間と会ってからじゃないと何かと面倒です」
「仲間？　君のかい？」
「いいえ。或斗殿のです」
またまた冗談を。オンラインゲームでもあるまいし、芝生の上で会いましょうなんて約束している仲間などいるわけがない。
ここまでくると或斗は笑わずにはいられなかった。鼻息が荒くなる。
「別に良いです。殿が信じられないのも分からなくもないです。けどそう思っているのも今のうちです。過酷な試練が殿には待っているんですからねッ」
ココは歩を再会させた。先ほどよりも腕の振り幅が若干大きくなった。
当然、或斗は本気に捕らえていない。はいはいはい、と適当に促してケラケラ笑った。

その直後だった。
ざわりと何かが芝生を這うような音がした。
ココが敏感に足を止めた。或斗にも静止するよう手を伸ばして訴える。

音の気配を察知するようココは当りに注意を向けた。ゆっくりと上半身を回転させる。
或斗は何がどうしたのか状況が飲み込めず、とりあえず音がした方に顔を向けてみた。
と、その時。
竹薮から蛇が飛び出したかのように、シュッという音と共に白く長い物体が飛び跳ね、或斗の顔を目がけて襲いかかって来た。
或斗は咄嗟に腕で顔を覆ったが、手首を巻くように圧力がかかった。
「な、なんだコイツ！」
見ると、信じ難い物体が付着し、手首を掴んでいた。
肘までしかない人間の腕だった。骨のように細く、真っ赤な爪が或斗の皮膚に食い込んでいる。
「ぎゃあああああ！」
或斗は半狂乱に喚いて腕をぶん回した。が、白い腕はビクリともしない。
「何なんだよ！」
パニックになる。太い毒蛇が巻きついたよりも恐怖だ。
「これはインバースの腕ですな」
ココは胸を撫で下ろすように言って、或斗の服の裾を強く引っ張った。「想像するですよ」
「は？　想像だって？」
こんな緊急事態に何を言うんだッ？
「バカ言え。早く何とかしてくれ！」
「だから想像ですッ。殿はまだ武術を取得してませんでしょ――あ、そんなに慌てないでくださいな。このインバースは比較的おとなしいです。危害も加えませんです」
「ウソつけッ。爪が痛いんだよ！」
十分ダメージ被ってるじゃないかッ。しかも気持ち悪い！
「早く取ってくれ！」

卒倒寸前の或斗の真っ赤な顔を見て、ココは長いため息をもらした。
「殿と上手くやっていく自信がありませんです」
「あッ？　何てッ？　――うわあ！　腕が動いた！　動いてるぅぅぅぅ」
白い腕は巨大蜘蛛のように指を動かし、トレーナーの袖口から潜り込むようになった。
「ふざけんじゃねぇぇぇぇ。そもそも何なんだよコイツはぁぁぁぁ」
「だからもうッ。ココの言うことを聞いて下さいな！　そうすれば簡単に外れるです！」
ココは地団太を踏んで言った。
「じゃ、じゃあどうすりゃ良いんだよッ！」
腕はさらに上を目指そうとする。そのたび鮫肌のようにザラザラとしている感覚が伝い、或斗の全身の産毛が逆立った。背筋がピンとなる。
「その腕が木の枝になったことを強く想像するです」
「はぁ？　木の枝だぁ？」
こんな状況でそんな呑気に空想が出来るかよッ。
「するです！　方法はそれしかないですよッ」
クソォォォォ。悪夢も冗談がキツイぜ。
「早くするです。じゃないと胸にまで入って行くですよッ」
そう言われたらやるしかないと或斗は思った。胸部にこの腕は勘弁だ。絶対に気絶する。
或斗は固く目を閉じた。その瞬間、二の腕にぞろりとしたものを感じた。確実に這い上がって来ている。
気色悪い感触を味わいながら木の枝であることを強く想像することは非常に難しい。何しろ実際の枝は人を襲わないのだから。
それでもどうにか茶色い枯れた枝が吹っ飛んで来たところを想像すると、一瞬だけ、巨大蜘蛛の動きが止まったかのようだった。そして指の部分を五本に分かれた枝に切り替え、全体的の樹皮の質感

や香りなどを想像した。物質自体は決して新しいものではない。
時間にしたら目を瞑っていたのなんてほんの数分程度だったはずだ。初めは怪奇な腕と変哲もない樹木とが入り交ざって思うように描けなかった。が、それでも続けていると、不思議なことに腕に絡まり付いているのは、人の手と酷似した「木」でしかなくなっていった。迷い込んだ森林で転倒し、その拍子に古い枝が腕に絡まったと言う細かい設定までもが出来上がっていた。

地面に何かが落ちる音がして、そこで或斗は目を開けた。
芝の上に転がっていたのは、水分が飛んだ樹木の一部だった。手に取ってみると樹皮はささくれのように逆立ち、長細い枝は五本とも内側に角張り、あたかもショック死した怪奇な生き物の生態にようであった。そう、足の長い蜘蛛の死骸のように。
「信じられない……」
或斗は思わず掴んでいた屍を落とした。袖を捲って腕を見る。余韻は十分残っているけれど、肌に異常は見られなかった。
するとココが亡骸に歩み寄り、胸に下げているペンダントの針を一本抜き、刺突した。途端に茶色の枝から色素が抜かれ、くすんだ粘土細工のように変色した。
「何をしたんだ……？」
針をペンダントに戻したココは、満面の笑みで或斗を見た。
「インバースのオーラは殿の能力が落ちた時にもっとも有力なエネルギーです」
「何だって？」
或斗は聞き返すが、ココは言葉の先を続けた。
「さっきはどうなっちゃうことと思ったけど、やっぱりスゴイですな。数分でここまで仕上げちゃう殿はやっぱり最強ですッ。さぁ、先を急ぐです。目指すはあの境界線です」
境界線とは、遠くに見えるぼやけた地平線のことだった。

「あのさ、本気で地平線に辿り着けるとでも思ってるのか？　あれはここから見てるから一本の線に見えるのであって、実際には地球と宇宙の境目だぞ。辿り着くわけがないだろう」
「いいや。行けるですよ。この島では不可能なことが可能ですから」
「んなバカな」
或斗は肩を竦めた。
「殿、よ～くあれを見てくださいな」
ココはピンと立てた人差し指で遠くを指した。
「見えませんですか？　滲んだ境界線が」
それは見えるが、まさか……？
「この島を取り囲む壁は、全てがあのようになってますです。とても不安定な場所です。最悪の場合は命だって消えてしまう恐れがありますですよ」
その話も後ほどするです。
とココは終止符を打ち、或斗の反応を窺っていた。

やっぱりそう来たか。恐れがありますですよと言われても行かなきゃならないんだろ、チビ助よ。選択の余地はこれっぽっちもないんじゃないか？
或斗は深いため息をついてから呆然と笑った。
「行きゃ良いんだろ」
「大正解です！」
ココは満面の笑みで金属のような声を出し、颯爽と目標の方へと歩き出した。
或斗は自分の頭と頬を引っ叩いた。夢である希望を捨てたわけじゃない。がしかし、望みどおりの展開には恵まれなかった。
首を垂らす或斗の視界に入った無残な枝は、或斗の気持ちを嘲笑うかのように小刻みに震え、そして砂となって消え失せた。

生と死の境界線

歩き過ぎ以上に歩いた足裏には無数の擦り傷が刻まれてヒリヒリと痛む。疲労の限界を超えた足は立ち止まっただけで小刻みに震えるし、ふくらはぎはサッカーボールのように硬かった。足が棒になるとはこういうことを言う。昔の人は本当に上手いこと言ったものだ。

何時間歩いただろう。陽は傾きかけ、空は一日の終わりを迎える準備をしている。

この地でも二十四時間のサイクルに変わりはなく、一応は宇宙的な時の流れが存在することが、或斗には異国で味噌汁を口にしたくらいホッとしたのだった。

目的地に到達する間、或斗は様々な容姿をした生態を目撃した。ココが言うには、どのそれもインバースと言って、攻撃性の強い「仮日本」に対する非難生物らしいのだが、そのインバースこそ、どのような性質でどのような影響があるのか、まったくの無知である或斗にとっては、漠然としか知らない妖怪と同類であった。歩くたびに首根っこがバネのように揺れる男とか、三輪車に跨る少女の格好をした老婆とか、膝から下だけの大群とか、猛スピードで駆け抜ける赤いブリキの電車とか、統一性がなくて妙な妖怪を或斗は目撃したのだ。

今回、インバースに一度も襲撃されることなく済んだのには理由があった。

境界線に帳が降りる前に到着するためにも、出会ったインバースと片っ端から対峙する時間を省かなくてはならなかったのだが、その方法はたった一つしかなかった。幻力である。

或斗は、自分とココの身体を透明にすることで時間を費やすことは惜しげもなかったから、随分と長い間、荒野の真上で瞑想するよう幻想を描いていた。それくらい集中しないと透明にはなれなかったのである。少しの隙で振り出しに戻ってしまう。

しかしながら、透明人間は本当に存在するのかもしれないと、或斗はこの時思った。輪郭も何もかも完全に消えた自分は、確実に透明人間を作れる人種だ。

ココは、或斗とはぐれないように洋服の裾を掴んで放さなかった。或斗の歩幅が大きくてついて行くのにやっとなのか、時々引っ張られて或斗は立ち止まった。

滲む境界線に辿り着いて或斗が思ったことは、この異世界は予想以上に生活し難いと言うことだった。ココほどの高さの標識には「↓」の印と、「食事」と「銀行」と「歩く人間」のマークが簡単なイラストで施されている。レストランがあってお金が引き落とせてショッピングができる、要するにデパートまるごとスッポリ土の中に埋まっているのだ。この世界では地下街が一般的のようで、住宅街やテーマパークも地の下に巣食っているらしい。

住み難い理由はそれだけではなく、歪む地平線の向こう側は、まさに生と死の境界線でもあるのだった。空の青と大地の茶が混ざり合ったカーテンの向こう側は、大量の白煙が大滝のように下方へ流れ込んでいて、一歩間違って踏み込んでしまえば命はないだろう。

そのせいか、地下街を訪れる人影はなかった。デパートの入り口なのであればそれなりの活気があるようなものだろうに。

透明の効力は過労と緊張とで切れてしまったようで、二人の容姿に色が戻り、少女が先頭に立った。

地下へ繋がる階段を下りた先は駅のホームとそっくりだった。ただ洞窟のように薄暗くて壁はゴツゴツとしている。そして電車こそ

ないけれど、ゴンドラのようにロープにぶら下がった白い球体の機械の向こう側は、出口と表示されている。

「殿、行くですよ」

ココはそう言うと乗り込んだ。

「大丈夫かよ、これ。そもそもなんで丸いんだよ」

どのような技術をもって作られたか分からないが、或斗には錆び付いたジェットコースターに乗るよりも気が引けた。

「大丈夫です。落っこちることはないです」

宥めるようにココが言う。

「丸いのは仲間の男性が作ったです。理由はココも分からないですな。後で訊いてみると良いです」

「さっきから仲間って言葉をよく口にしてるようだけどさ、ロープレでもあるまいし、何なんだよ」

乗ろうか乗るまいか或斗は本気で考えあぐねていた。このまま乗ってしまったら、一生、現実には戻れないような気がしたのだ。

ココはニッコリと笑った。

「冒険ですよ、殿。深いことはまだ話せないですけど、掻い摘んで説明するとですね、殿に与えられた指令は、この島での冒険と遂行です。それを仲間と一緒に達成させるですよ。この世界の成功は殿たちにかかってるですからね。ココはそんな殿の助手です。とても光栄です」

胸を張り、ココは白い歯を見せた。

或斗は両肩を落とした。

意味が分からん……。

「断ると言ったらどうなる？」

物は試しに訊いてみた。帰れる可能性があるかもしれない。

だがココの一言で、或斗の望みは一蹴された。

「無駄です。たとえ逃げてもココが直ぐに生け捕ります」

生け捕るって……聞こえが悪いじゃないか。

「殿、聞いてください。この世界に来た以上は国の命令に従うしかありませんです。これは絶対です。国のためです。逃げようなんて考えるだけ無駄です。それに、殿は近々五千万円を手にするです。国が殿の能力を五千万円で買ったということです」
「五千万だって！？」
或斗は一瞬だけ金の匂いをかいだような気がした。
「そんな話、聞いてないぞッ！」
「はい。言ってませんです」
「……いつ手に入るんだよ？」
「それはお偉いさんに訊いてくださいな。もしかしたら既に殿の家族が手にしたかもしれないです」
「何ッ。じゃあなんだ？　俺が任務を経て戻ったら、実家がリフォーム済みってこともありえるってことか？」
「そうかもですな。でも、殿のトトさんやカカさんが殿を生んだです。トトさんとカカさんがいたからこそ、二人が結ばれたからこそ、幻力の勝った男の子が生まれたですよ。二人が使ったからって責めることは出来ませんです」

子供のくせにらしくないことをと思いながらも、五千万円の大金を耳して、或斗は益々の不信感を抱いたがしかし、同様に卑しい欲情も湧いてくるのが腹の底から分かった。
ここで逃げたとしても捕まることは避けられない。仮に逃げ切った所で五千万円との縁もプッツリと切れることだって間違いない――五千万円があったら一人暮らしも可能だし、毎日大好きなカツサンドやチャーシュー麺を食べたって十分余る額だ。まぁ親に五百万円くらい寄付したとしても、四千五百万を手にするのだ。高校を卒業して一年くらい遊んで、車やバイクを一括で買って、その後は適当な企業に就職したとしても、車やバイクの借金はないのだから月給は余裕で遣り繰り出来るし、何よりも多額の貯蓄があるのだ。無駄遣いさえしなければ程好く遊べて実に楽しい生活を送ることが出

来るじゃないか――まぁ家族らが勝手に消費してなければの話だが。

「行くですよ、殿」

或斗はスッと顔を上げた。ここは五千万円を胸に行くしかないだろう。

或斗は乗り込む前に球体のボディーを軽く叩いた。まるで岩を叩いているような実の詰まった音がした。とても頑丈そうだ。続いて彼は背を丸めて慎重に足を踏み入れた。ぶら下がっているだけなのに意外にも安定感があって高い技術が窺える。

「やっぱり殿もお金は好きなんですな」

入り口を閉めたココは楽しそうに笑った。

或斗は咳払いをし、天を仰いだ。アーチ状の天井は何だかとても広く見えた。好きと言うか、必要なのだ。人生がかかっているのだから。

「それで？　これからどこに行くんだよ？」

「靴屋です。殿に靴を買ってもらうです」

「買ってもらうって言ったって、ご覧のとおり俺はまだ、一文無しなんですけど」

或斗は両手を広げて見せた。

球体がわずかに下に動いた。その直後、狭いトンネルに吸い込まれるように加速し、落下した。

「お金のことは心配いらないです。殿は国が認めた逸材です。特別な人間です。この世界では殿の功績がお金になるです」

「言ってる意味が分からない」

或斗はそう言いつつも、エレベーターのロープ事故に遭ったような恐怖が纏わりついてココの声がこもって聞こえた。しかし、下手なことを想像するのは危険すぎることも或斗は会得していた。自分には幻想を描くだけでそれが現実となってしまう力がある。この球

体が硬い地面に叩きつけられて粉々に破壊することは何が起こっても想像してはならない。

或斗は精神を統一するために目を瞑って、一から数字を数えていった。

ココは、或斗が大人しく耳を傾けていると思い込んでいるようで、お金よりも大事なことがあるとか何とか力説しているようだった。が、或斗の耳には届くことはなかった。

数字を三十まで数えた所で、或斗は目を開けた。ココはまだ何かを語っている。

どこまで落ちるのだろうか。結構なスピードが出ているようにも思える。

気圧の変化が少しも感じられないのは下降する速度が遅くて距離にすると意外にも短いのか、それともこの世界だからだろうか。そしてこの地下にはインバースと称されている奇妙な非難生物はいないのだろうか。

とその時、箱がわずかに固く揺れた。目的の階に到着したようだ。

スッキリした表情のココがドアを押し開ける。その目前に広がる奇抜な光景に、或斗は言葉を失った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4738x/

幻に揺れる淡い島

2011年10月19日01時04分発行